

研究室彙報

佛教學研究室

聖典語學會

十二月例會

一、日時 十二月十一日午後三時

一、處 第十一教室

一、講師及講題

漢譯佛典に就て其の翻譯方法の概観

泉 芳環 教授

寺本、諏訪兩教授其他學生多數出席。

眞宗學研究室

○十二月十三日(金) 午後三時より第二教室にて左の如く例會を開く。

一、淨土見聞集に就いて 稻 葉 教 授

○二月八日(土) 午後一時より第二教室にて左の如く例會を開く。

一、淨土論に於ける入一法句に就いて 石 塚 助 手

○二月十五日(土) 午後一時より左の如く第二教室にて例會を

研究室彙報

開く。

一、三業惑亂の一餘孽

禿 諦住氏

○二月十五日(土) 午後三時より第二教室にて昭和十年度眞宗學專攻生の送別會を開く。

教授學生多數出席午後五時盛會裡に閉會す。

東洋史支那學研究室

東洋史學會

○昭和十年十二月五日(木) 午後三時於第十一教室例會開催。

「晋室の南渡と南方の開発」を讀みて 二回生 藤井弘君

秋貞教授、野上教授、學生約十名出席。

○十二月十日(火) 自午後三時例會開催。於應接室。

「唐代の佛教儀禮特に法會に就て」を讀みて二回生原尻隆吉君野上教授、學生約十名出席。

○昭和十一年一月卅日(木) 自午後三時於應接室例會開催。

「唐代初期の土地問題に就ての再考察」 三回生、福岡明成君

羽田、諏訪、野上諸教授學生十數名出席。

なほ同日自午六時於千也卒業生送別會を行ふ。

○二月四日(火) 記念撮影を行ふ。

○二月八日(土) 自午後一時半於第十一教室例會開催。

「金朝の經濟問題の一端」 三回生、黒田純一君

支那學會

一、昭和十一年正月二十四日午後五時より、下鴨與平鍋にて尾野田、河合兩君のため豫餞會を開催す。會する者支那學講座擔當教授は勿論、在學會員共に拾參名、八時すぎ盛會裡に散會す。

哲學研究室

西洋哲學會
倫理學會

例會

○昭和十年十一月二十日(水) 午後六時半於應接室。
題クロナーのヘーゲルに就いての一考察

——Weibold に就いて——

二回生 五辻惠敬君

卒業生送別會並に卒業論文發表

○一月三十一日(金) 午後六時半より二條寺町 鑑屋に於いて催す。出席者は卒業生打田、木場、島、義輪の四君の外、立花西谷、正木諸先生及び在學生等。盛會であつた。

デカルトの神論

義輪 英章君

ヘーゲルの論理學に於ける始源の問題

木場 集藏君

大谷大學哲學會

○昭和十年十二月七日(土) 午後一時より本學第二教授に於て

特別學會を開催す。

講師 京都帝國大學文學部教授 文學博士 植田 壽藏氏
演題 藝術の内容

來聽者 朝永、鈴木弘、寺本、横川、正木の諸教授を始め學生其他多數にて盛會、講演後引續き會議室にて講師を中心として茶話會を開く。午後五時半閉會。

國史學
國文學
研究室

國文學會

○十一月二十二日、午後三時より會議室に三回生の研究發表會を開く。

石川縣方言の研究

橘 勇君

夏目漱石について

梅原 顯照君

○十一月三十日、午後零時半より會議室に研究發表例會を開催。方丈記について

平家物語を構成する佛教的要素

二階堂慈廣君
松原 昭光君

油煙齋貞柳の研究

秦 晃晴君

○一月十日、會報第七號發行、内容——謠曲文學の思想的考察(赤阪)、鬼貫の研究(内海)、橘曙覧の研究(佐々木)、義門考(東條)、宇津保物語の後代偽作説について(西島)、芭蕉の一面(北條)、人としての實朝の一面(その文藝解釋上の一示唆と

して(仲野)、其他。

○一月二十四日、午後三時より第七教室に於いて、第四回談話會を催す。

源氏物語と惠心僧都

西島 惠君

○二月五日、正午玄關前に於いて卒業生送別記念撮影。

國史研究會

○尋源發行

八月二十五日印刷終了二十六日發送、先輩諸兄より激勵の言葉を戴く。

○第七回史蹟研究會

日時 九月二十七日

場所 恩賜博物館 六波羅蜜寺

近衛家瀝公展：熊野懷紙、槐記、御堂關白記、兵範記

後二條殿記

六波羅蜜寺：空也上人木像

出席者 栗野教授以下二十三名

○第三回例会

研究室彙報

日時 十月二日 午後三時半

場所 會議室

古代佛像の人類學的研究

石崎 達二氏

朝鮮宗教史並現狀概觀

館 義順氏

出席者 德重教授、石崎、館、藤島先輩、以下十一名

○第四回輪講會

日時 十月三日午後三時

場所 第五教室

進度 歴史認識の目標について論究

○第五回輪講會

日時 十月十日午後三時

場所 第十三教室

進度 價值問題及歴史に於ける對立問題

○第四回例会

日時 十月二十三日午後三時

場所 會議室

日本法制史の研究

牧 健二博士

法制史 — 1 常識的史學法制史 — ③ — 三浦博士
 — 2 解釋法學的法制史 — ② — 中田博士
 — 3 現實法的法制史 — ① — 牧博士

3、は Dialectic に 1、2 より己が體驗により出でしものである。
 A::法律學
 B::歴史學

古法制の體系は支那より來りし體系にしてその本質は勸善懲惡と二法に非ざる一箇の教化法にある。されば法律は道德と不可分なるものであつた。こゝに於て面白きは不應爲罪なるものありて、これが律令に於ける特徴とすべきものである。

律令組織と現行法組織と比較すれば



となる。要するに現行法を無理に古代法制に當てはめんとするは不可である。されば公法私法何れにも當てはめる事の出來ぬものはそのまゝにして解釋すべきなり。

法制史はたゞ現實法的法制史のみなり。

出席者 牧博士、德重教授以下二十一名

○淮水行藏志翻刻

十月二十五日、德重教授御指導にて研究科、蒲原正浩氏の正確なる校正によりて發行。

○第八回史蹟研究會(秋季旅行)

時 日 十月三十一日より十一月二日
 場 大和河内方面

石上神社(七枝、劍、勾玉、鎌倉時代建築) 天理教々
 廳、大神神社、聖林寺(十一面觀音) 以上第一日
 藤原京址、畝傍陵、橿原神宮、當麻寺(塔、文書) 觀
 福寺以上第二日

觀心寺(弘仁佛の研究) 河合寺、金剛寺(禪惠の奥書
 の研究) 譽田神社(馬具) 譽田陵(陵内埴輪見學) 以上
 第三日

三日間の旅行は相當疲勞を覺えしも、天氣よく、研究資料の豊富なりし事は誠に嬉しかつた。藤原京址の見學、觀心寺の見學は實に喜ばしいものであつたと思ふ。

出席者 栗野、德重兩教授以下十三名

○第九回研究會

時 日 十一月八日
 場 所 博物館

主 旨 光悅の研究

光悅は眞に多藝多趣味にして本職の双劍に關する技倆以外に書畫に秀で、天才の發露に依て大に技倆を振ひ 徳川文藝復興

期の逸才である。書道に於ては光悅流なる一流あり、三藐院、昭乗と共に寛永の三筆と云はる。

秋草下繪の色紙舟橋時繪硯は特に秀でたものである。

○第五回例会

日時 十一月九日

場所 草場醫院

主旨 史蹟研究旅行報告

藤原京址を踏査して

研究科 木村捷三郎氏

禪惠の奥書の史料價值

同 蒲原 正浩氏

美術史上の觀心寺

二回生 江崎 雪君

禁足地について

一回生 佐々木眞悟君

源信僧都について

同 玉 樹 穆君

出席者 徳重、栗野兩教授以下七名

會場不都合な爲特に多賀君の御好意により下宿草場醫院にて開催するを得た事を厚く感謝する。

○第十回史蹟研究會

日時 十一月二十九日

場所 太秦廣隆寺

飄波式佛像の徹底的研究

出席者 栗野教授以下十七名

○第六回例会

日時 十二月四日午後三時より

場所 會議室

研究室彙報

一遍上人雜觀
宇野主人について

出席者 徳重教授、日下教授以下二十二名

○第七回例会

昭和十一年一月二十三日午後三時より

場所 會議室

織田時代に於ける政教關係の思想史的研究

多賀 威夫君
井上 彰淳君

元祿時代に於ける上方町人の研究

出席者 徳重教授以下學生二十五名

○第八回例会

日時 一月二十九日(水) 午後三時

場所 會議室

平安末期に於ける末法思想の研究

泉 原君

近世封建制度崩壞の經濟史的研究

平 君

徳川幕府の寺院政策について

松 浦君

出席者 徳重教授以下學生十八名

送別會

日時 二月五日(水) 午後三時

場所 道 樂

出席者 徳重教授、西田教授以下學生二十四名

前日の大雪の爲臨時に晝間より東山の雪を眺め開宴す。御多忙中にも拘はらず兩教授の御出席を得しを喜ぶ。(江崎)

昭和十年度 大谷學會決算書

收入部

會費收入

金二、〇〇一、〇〇〇^門

學報賣下收入

金二〇、二〇〇

利子及雜入

金八五、六五〇

補助受金

金二、一〇六、八五〇

計

支出部

印刷費

金一、二〇八、五七〇

原稿料

金三二五、五五〇

編輯手當

金二四〇、〇〇〇

通信運搬費

金二五、〇七〇

雜費

金一、七九九、五三〇

差引剩餘金高

金三〇七、三二〇

右剩餘高ハ之ヲ準備積立金ニ編入ス

準備積立金左記之通

前年度ヨリ繰越積立

金二、〇六二、四一〇

本年度末新編入積立

金三〇七、三二〇

計

金二、三六九、七三〇

右之通ニ候也

昭和十一年一月

會計課